

平成 31 年 2 月 10 日（日）協働のまちづくり活動支援事業報告会を開催しました！

■ 開催の主旨

市民と行政による協働のまちづくりを推進するため、NPO・市民活動団体等と市民の皆さんとの交流と地域コミュニティの再生や住民主体のまちづくりを考える機会として、市が支援した協働のまちづくり活動支援事業の成果発表となる平成 30 年度報告会を開催しました。

1 日時・場所

- 平成 31 年 2 月 10 日（日） 午後 1 時 30 分～3 時 40 分
- 江別市民活動センター・あい（江別市野幌町 10 番地の 1 イオンタウン江別 2 階）

2 プログラム

●協働のまちづくり活動支援事業の事例報告

○報告団体（報告順）※カッコ内は連携団体

- ①市民活動団体メディネット江別
- ②子育て支援ワーカーズ・きらきら（連携先：新栄自治会）
- ③江別創造舎
- ④生活クラブ江別（連携先：江別子どもの未来を考える会）
- ⑤支え合いの拠点（居場所）づくりの支援のための研究・実践グループ

●事業報告会コメンテーター（左から、藤本氏、阿部氏、田原氏）



藤本 直樹 氏（北海道情報大学 経営情報学部 先端経営学科 准教授）

阿部 実 氏（江別市自治会連絡協議会 会長）

田原 久美子 氏（江別市社会福祉協議会 副会長）

●各団体の事業報告及びコメンテーターの質疑・コメント（概要）

①【市民活動団体 メディネット江別】

「市民活動団体支援のための活動紹介ビデオ作成事業」



発表者：本年度も、市民活動団体支援のための活動紹介ビデオを作成し、今年で2年目になる。事業の概要は、昨年度同様、1分間CMの作成で、本来の活動を継続しながら行っている。ナレーション300文字相当の1分間CMを作成し、CMの内容および作成対象の団体は、本年度もコラボのたね登録団体から3、4団体を抽出してやりたいと思っていたが、内容に少し変更があったため、後ほど説明する。また、CMについては江別市民活動センター・あいでのテレビ放映を継続して

いる。ネット配信は今までどおり「えべつtv」のホームページに掲載中。

本年度の活動実績として、CMの作成は4団体行っており、まず、NPO法人あじさい亭。ここは居場所・出場所づくりを目的にしている地域密着型の活動団体であり、パソコン講座やITひろば、カラオケ大会、麻雀大会などいろいろと行事を進めており、そのCMを作成した。次に、市民活動団体メディネット江別。これは私どもの団体だが、まだCMを作っていないことに気づき、作成した。次に、えべつ手話の会。手話言語条例が来年度から施行されることもあり、タイアップができてとても良かった。これは聞こえない方たちとの触れ合いを通して手話を学び活動する団体で、幅広い年代が集い、一緒に学ぶというコンセプトで活動している。また、江別には、えべつ手話の会や大麻手話の会など4つほど手話の団体があるが、今回はえべつ手話の会のCMを作成した。それから一般社団法人青年会議所。これはコラボのたねとは関係ないが、青年会議所の方からつくって欲しいという声があった。青年会議所は、ホームページを持ってはいるが、自分たちのPRする場がないということで作成した。

それでは早速、作成したCMを見ていただきたい。

—上映—

①NPO法人あじさい亭 ②市民活動団体メディネット江別 ③えべつ手話の会 ④青年会議所

このように4つのCMを作成している。このCMの出来については、さまざまな意見があると思うが、非常に好評な声もいただき、9つの団体から作って欲しいという依頼があった。これを見られた方からは、私の団体も作って欲しいと言われることが多い。ちなみに平成29年度に作成したCMは、江別観光ボランティアガイド、あおむし人形劇団、子育て支援ワーカーズきらきら、朗読ボランティアグループまちの灯の4団体である。今の所8本のCMを作成した。

本事業による効果としては、先程見ていただいたように、市民活動団体の宣伝CMによって、活動の宣伝効果の向上が見られるということ。また、これを新人教育や新しい会員獲得のための教材として使えるのではないかと考えている。なお、団体の活動状況のビデオ化は、コラボのたね登録団体を優先にやっと思いこうと思っている。これを作成することで、活動紹介が飛躍的に向上するのではないかと考えている。1年目に購入させていただいたモニターを、江別市民活動センター・あい

に設置してもらい、実際に継続して使っていただいて、私どもの撮ったビデオも含めて紹介させていただいている。そのことによって不特定多数の方々への宣伝効果が向上するのではないかと考えている。

最後になるが、今回の事業の収支決算はまだ確定していないが、協働のまちづくり活動支援事業からは2万7000円と考えている。SDカードやDVD-Rなどを購入して活動の助けとして使用していきたいと思っている。

藤本：4つの作品を拝見したが、どれもわかりやすく各団体の活動状況がとても短い時間の中で凝縮されていた。

私から質問が2点ある。先程紹介のあった本事業の効果で、いろいろな市民活動の活動状況をいろいろな場面で動画紹介することの効果は優れている手段だと思う。それで、情報発信していく対象をどのように考えているのか。効果を更に上げていくためにはいろいろな手段、媒体に広がりを持つのか。1点目は、宣伝していく対象や手段について、こうしていきたいという思いがあれば教えてほしい。また、活動2年目を迎えているので、来年度このような取り組みを継続する予定があるなら、どのような発展や広がりを持たせていくのかアイデアがあったら教えてほしい。

発表者：私たちの活動の対象者は不特定多数ではあるが、動画を見ていただくことで、団体の活動について大体のことが分かっていただけのではないかと考えている。また、団体の新人教育用として使えると思っている。

手段はホームページが中心になっており、ホームページを見てももらわないと視聴できないので、できれば江別市の広報などのホームページにリンクを置いてもらい見ていただくという方法もあると考えている。

来年度の発展や広がりについて先生のおっしゃるように頭が痛い問題で、どうすれば良いかこれから考えていきたい。

阿部：動画を見せていただき、素晴らしいCM作っていると思い、改めて感心した。

現在、何人ぐらいの制作スタッフがいるのか。例えば情報大学の中でも映像制作を勉強している学生もいるが、これから学生と一緒に活動する考えがあるのか。私は高齢者クラブの役員もやっているが、そのような高齢者関係のいろいろな活動もPRしたいので、そのような団体もこれから作成してもらえるかどうか2点お聞きしたい。

発表者：まず、情報大学との兼ね合いは、5、6年前に一緒に活動するのはどうかという意見もあったが、大学生が考えていることと、私たちが考えていることが相互に繋がらないところが多く、また、時間的に合わず難しいと思っている。また、現在作っているスタッフはそこまで数は必要ではなく、活動団体から写真をいただき、それ以外に私たちが撮りためているビデオを使用している。必要であればビデオを取りに行くことがあるが、そのときには、撮影に少し人員がいる。ナレーションは、パソコンのAIナレーションというソフトを使用しており、それに文言を300文字入れれば、およそ1分になるので、文言も団体に考えてもらい、それをナレーションに合うように修正していく。ナレーションは文字で流れるが、編集で調整をしている。このように、ほとんどが編集作業で、何十人もスタッフが必要な仕事ではないので、私がほとんど作成している。

高齢者クラブや高齢者の方々の CM は依頼があればいくらでも作る。先程言ったように、写真と文言をいただければ一度作成し、お見せできる。例えば、自治会ごとに作成を依頼されてもできないことはない。自治会の方々がこういうものを作って欲しいという依頼があれば、難しくなくできる。私の大きな希望としては、CM をたくさん作り、CM だけで一本のビデオテープが作成できればと思っている。ホームページを閲覧すると、江別の CM ビデオがたくさん出てくるのが理想としてある。

阿部: 高齢者クラブも年々減っているのです、そのような宣伝をしながら進めていく道もあると思い、質問した。

是非、よろしくおねがいします。

田原: 阿部さんも言ったように、CM だけで終わるのではなく、更に深いビデオの作成を考えているのか。手話が議会や市でも取り上げられているが、これから手話の会とのコラボの予定も聞いているので、手話を小さい子どもたちでもわかりやすいようなビデオ作成の予定はあるか。ぜひ予定に入れてほしい。

発表者: まさに、平成 31 年度の協働のまちづくり活動支援事業で検討しており、新企画として手話の啓発動画の作成を考えている。「手話をまなぼう」動画を 1~2 分間で 3 本ほど作っている。江別の歌に「風はみどり」があり、それを手話に合わせてやる内容になっている。その動画を配信するために生涯学習機関誌の「ら・ら・ら」内に QR コードを設け、それをスマホで読み取ると動画を閲覧できるようになっているものを実際につくっている。1 回目はすでに配信しており、2 回目の動画は、「ら・ら・ら」が発行されれば、見られるようになる。現在その活動を進めており、特に来期から新しく活動していこうと思っている。

また、来年度も 1 分間 CM を継続することを考えている。

田原: ありがとうございます。ぜひ実現させて欲しい。

会場: コラボのたねのホームページ自体にリンクを貼ることはできるか。また、自分の団体のホームページを持つ団体があれば、そこにビデオのリンクを付けることはできるか。

成田: コラボのたねという市民活動団体のホームページがあるが、そこにメディネット江別が作成した動画のリンクを貼る予定になっている。

発表者: 作成した団体のホームページには載せてもらうように話している。

②【子育て支援ワーカーズ・きらきら】(連携先：新栄自治会)

「地域サロン きらきらカフェ e-たいむ (ebetsu eat enjoy)」



発表者：地域サロン e-たいむは錦町の新栄会館で、毎月第3水曜日の10時半から13時の間で実施している。今回の広報手段として、前年通り、毎週行っている「きらきらひろば」の方へのご案内と、団地に住む方からのご提案で、団地の各出入り口の掲示板にはチラシを貼らせてもらい、正面玄関の引き戸には写真付きのポスターを貼らせていただいている。その他に今回は、江別全域での参加に拡大するため、「広報えべつ」への掲載、公民館、集会所などでのチラシの掲示など、

合計で1000枚置かせていただいた。また、きらきらのFacebookからのお知らせ、新栄会館近隣へのチラシが100枚、「きらきらひろば」でのチラシの配布。開催時には、のぼり旗を掲げるなどを実施した。地域サロン e-たいむとは何か、初めての方もいらっしゃると思うので説明する。

eは江別のことを話す、江別の人が集まることを意味する ebetsu の e、enjoy は楽しむという意味で、私たちが楽しむことはもちろん、楽しい場にするという意味もある。eat は食べる、食事をするということ。今年度は eco も加わり、環境に配慮して、効率的な料理や資源の再利用で楽しむという意味になっている。「たいむ」は時間、時代ということで、そのような良い時間を過ごして欲しいという気持ちが入っている。これらのことを大切にしながら、月に一度だけのサロンなので、スタッフ一同、丁寧に開催している。時間ができたときにふらっと寄ってみたいくなるような雰囲気作りを心がけ、どなたでも、どこに住んでいる方でもいらしていただけるようなサロンになっている。今年度は、最初に年間スケジュールを決め、会館に予定表を貼らせていただいた。予定表を見て、それに合わせて来てくれる方もいた。年度初めに、事前に日時を決めておくことで、皆さんも目的を持って来場しやすくなったので、来年度も早めに計画を立てていきたいと思っている。毎月の企画は、暮らしに役立つ出前講座や、季節に沿った小物作りをして楽しんだ。寒くなってきた9月の保温調理や、10月の旭川ガスによる効率の良いガスの使い方講座など、参加した方だけではなく、講師を引き受けてくれた方々からも、このような企画は初めてで、視野が広がったなどの嬉しい言葉をいただき、地域とのつながりを強く感じた。また、最近出会った親子の方に e-たいむのことを紹介すると、そういうところを探していたと大変喜んでいただき、家族が遠いため、祖父母とのふれあいが難しかったようで、ご近所の方と接しながら息子を育てたかったというお話をしてくれた。その親子は、今では続けてサロンに来てくれている。参加する楽しみの一つになればと思い、スタンプカードを作成し、5つ集まったら手作り小物をプレゼントするということも始めた。小さな和紙でつくったバッグになっている。12月にはお正月用に団地の方々と折ったお祝いツリーを、団地の新年会で飾ってくれた。とても好評だったと聞いている。参加者からは、「いつも親切に素敵な笑顔にほっとしている」、「和気あいあいと楽しんでいる」、「アットホームな雰囲気が居心地良い」、「赤ちゃんを抱くこともできて楽しみが増えた」、「サロンがない日でも団地の方々と集まって折り紙をしたりして楽しく過ごしている」という声をいただいた。今年度で2回目の開催となった11月10日の e-たいむまつりには、33組65名の参加があった。昨年度に比べて10組、30名程も多くの方々が来てくれた。直前に、近隣の方へチラシ500枚を配布し、当日そのチラシを握りしめ、

こんな良いことをやっていたのかと来てくれた方もいた。また、選考会のときに学生ボランティアの参加やスタッフの家族、娘、息子たちの参加手伝いはどうかというご提案をいただいたので、このお祭りのときにはスタッフの娘を始め、男女合わせて5名の学生に参加してもらった。作品作りやアイデアなどは家族と一緒に加わって考えており、家族の理解も深まった。学生が入ることで雰囲気明るくなり、子どもたちも学生と楽しそうに遊んでいた。地道なチラシ撒き効果もあったのか、会場内が収まりきらない程の賑やかさとなった。e-たいむまつりのアンケートでは、「年齢層に関係なく誰もが参加できる地域サロンは今後どんどん必要なのではないか」、「食べ物がたくさんあり楽しくて子どもは時間が足りなかった様子、親はゆっくりできた」、「ポップコーンや綿あめをつくる場所が見られて子どもたちは喜んでいて」、学生からも直接「子どもやお年寄りと一緒に触れ合えて今後の活動に活かされるのではないかと思った」という声をいただいた。

次に、開催日時と参加数はご覧の通り、10回開催時点で132組158名の親子の参加、今年度は残り2月20日と3月20日の2回となった。この事業の継続性と今後については、少しずつではあるが、形が整ってきたように思う。必要なサロンだと思ってくれる方や、今年度は参加してくれていた方から、スタッフ側にも興味があり一緒にやってみようなど嬉しい声もいただいた。まだ、新しい挑戦をしていけると感じている。参加者からと地域スタッフの方から企画してみたい講座もいくつか、上がってきている。

今回、この事業の必要性をご理解いただき、15万円の助成金をいただいた。収入では、参加費は予定を上回ったが、毎月平均13組なので、15、6組の来場がほしいところ。1日イベントのまつりの売上は、来場者増加に伴い売上も良かった。地域の応援スタッフのおかげだと思っている。正式には3月20日の事業が終わり次第報告する。また前回、この席でアドバイスいただいた、赤い羽根共同募金への申請も現在提出中となっている。地域サロンきらきらカフェ e-たいむは、きらきらがきっかけをつくったに過ぎず、参加する人の一人ひとりが作り上げているような雰囲気にしていきたい。顔が見える関係をつくり、子育て世代と今は縁がない人ともつなぎ、地域の活性化となることを願い、来年度も継続していきたいと思っている。

ここで連携先である新栄自治会の総務部長、三浦より一言申し上げる。

このように若い方々が一生懸命活動してくれて、折り紙などでもデイサービスに行ったりしている方からは、後から、こういうものを教えて欲しいという声をいただき、私たちも若い人たちから教えられ、また家々に教えに行くのも忙しいが、楽しく活動できている。活動をどうすれば良いのかというときに、ただ食べたら終わりというのではなく、こういうやり方があると、きらきらさんが情報をたくさん寄せてくれて、それを触れ合いの場で活かしていけるのがとても楽しいと思っている。これからも続けていきたいと思うので、どうぞよろしくお願いします。

阿部: 大変内容のある発表だった。団地の会館の場所も良いから非常に集まりやすい環境だと思う。これから、人がまだまだ集まりそうな気がするが、介護支援関係の要支援1、2という方々は介護保険の対象にならなくなるので居場所がなくなる。そういう状況になるとあなた方の活動をしている人は、これから非常に生きてくると思う。

一度にはできないが、例えば野幌の住区会館などを利用して、他にもう1ヶ所か2ヶ所増やす可能性があるのか教えてほしい。

発表者: やりたい気持ちは満々だが、自分たちだけではなかなか難しいと思っている。

阿部：実際に今、私たち高齢者クラブもふれあいサロンとして立ち上げているので、私たちの何か力になってもらえないか。私も当面そのような方向で動いているので、ぜひ皆様のノウハウを活かしていきたいと思う。

田原：発表された方の笑顔を見ていると、会がわいわいと楽しく進められているのだと感じる。年 10 回実行されている中で、パンフレットを見ると消費者協会からの出前講座が多いが、阿部さんが言ったように、皆さんの役員の方々だけではなく、他団体から出前講座を要請し、内容を充実させて、これからも頑張っていたきたい。共同募金を申請されたこと良かったと思う。

発表者：ご提案ありがとうございました。

藤本：お話をお聞きしている中で印象深かったのが、実際にサロンやイベントに参加された方がスタッフとして参加しているのがとても良い循環になっていきそうで、素敵な状況だと思った。活動 2 年目であえてお聞きするが、この 2 年間でみなさんが少し物足りない、不十分だった、改善したいというところがあったら教えてほしい。

発表者：今回はイベントを全て 10 回とも入れてみたが、それが良かったのか。ただゆっくりしたい方もいるのかなと思っていて、つい先日も三浦さんとそれについて話し合った。2 時間半の中で、1 時間でも出前講座のようなものがあった方が、メリハリがあって良いという意見が出て、来年度もやることに決まったので、充実してやれたらと思っている。活動の方向は見えてきている。また、広報をもっとしたいので、時間がなかなかないが、きっちり地域に根ざして足でチラシを配りに行きたいと思う。それを本当に持ってきてくれた方がいて、スタッフに入りたいと言ってくれた方も今日もいらしてくれているので大変励みになっている。

会場：大変よいことをしていると思うが、新栄の外側からどのぐらいの人が参加しているのか。新栄団地の中だけなら新栄自治会だけでやればいいし、他のこういう制度もあるので、次をどう考えているのかを含めて、どんな状態かを聞きたい。

発表者：最初は新栄団地の方 5、6 人から始まっているが、現在は、いつも 13 組ぐらい来てくれていて、その方たちは外から来てくれている。だいたい半分ぐらいになっている。チラシを配った e-たいむまつりからも増えてきている。また、自治会関係なくどこからでも参加していただけるサロンなので、団地の方がお友達を呼ぶときに、札幌の友達を呼ぶのも可能なサロンになっているのが強みになっている。自治会の人だけではなく、その方が遠くのお友達を呼んでも良いということになっているので、どこに住んでいる方も来ていただけることを全面に出して活動していきたい。

③【江別創造舎】

「江別の文化・歴史を語る！つなぐ！語り部の記録 2018」



発表者：江別創造舎は、2007年に結成し、地域文化振興活動「個が生き、個が活かされる地域づくり」、「地域に生き、地域を活かすヒトづくり」ということで、文化振興活動をし、江別カルタの制作や講演会、江別カルタ大会とさまざまな形で活動を推進している。本事業は3年目になる。目的として、江別の文化歴史に精通した方々による語り部の記録をDVD化し、江別の有形財として私たちの活動が何らかの一助となればという思いで推進している。今回の語り部は11月11

日(日)13時から16時半に行った。広報の誤りもあり、当日来られなくなかった方がいる中で、62名の方にお越しいただいた。語り部としては、新聞等でご覧の通り、なぜ、この地で起業したのかを、江別製粉株式会社代表取締役会長、安孫子建雄様、株式会社菊水代表取締役社長、杉野邦彦様、そして株式会社町村農場代表取締役社長、町村均様にご講話をいただいた。コメンテーターを、元江別市情報図書館館長であり江別創造舎の一員である佐々木孝一様。記録、編集を萬が担当し、私が司会を担当した。この活動は北海道新聞にも取り上げていただき、町村社長がこの3名で撮ったのは今まで初めてではないかということで、この3者の記念撮影は、希少性の高い写真となった。これからその様子をまとめたDVDを5分間ご覧いただく。

—上映—

1人20分ずつの講話を5分間にまとめてご覧いただいた。これを1人1枚ずつのものと、1枚にまとめたものを、えべつ協働ねっとわーく、情報図書館など視聴覚室があるところ、そして置いていただけると了承をいただいたところには配置する予定。是非ともご覧いただければと思う。最後に事業収支について、助成金3万円は3人の講師料として1万円ずつ全て支出した。それ以外のところはまだ確定しておらず、DVD作成や完成案内の広報チラシを学内の人に制作していただいているので印刷をすれば全ての事業が終了するが、今の段階で既に赤字になっている。

事業成果と今後については、やはり江別の産業発展に大きく寄与されて、現在も先駆的に経営者のリーダーとして産業界を引っ張ってくれている御三方なので、とても興味関心の高いものになった。私たちがそれをDVDにどれだけ引き出せたかは微力ではあるが、真摯に取り組ませていただいたので、いろんな場でご覧いただければと思う。そして、このDVDは、各所の視聴覚の機関があるところで閲覧でき、お貸しするシステムも取りたいと思っている。

この語り部は皆さんから反響が大きく、今後についても、継続的に江別創造舎として取り組んでいきたい。そして、それ以外のところについても新たな取組としての企画を多々考えているので、江別創造舎のメンバーの力を借り、そして周りの地域の方々のお力添えをいただきながら、地域文化振興活動を推進していく所存である。

阿部：協働のまちづくり活動支援事業は3年間を区切りとお聞きしているので、今後の展開に向けて一点お聞きしたい。取材をし、講演の記録をDVD化された成果が積み上がっていると思うが、DVDだけではなく、YouTubeのようなインターネットメディアやSNSのような媒体を通じて、もう少し

広くいろんな方にご覧いただけるようなことを今後考えているのか。

発表者：講話された方々の肖像権は3年間の活動の中でYouTubeに掲載することをご了解頂いて作っていないので難しい。今後、もしそういった公益的な部分での地域文化振興という意味で期待されるのであれば、9名の方々にご了解をいただいた上でYouTube等に上げることになると思う。現段階はDVD化することのみで肖像権をいただいているので、当人に確認しなければならない。

藤本：今後、各出演者、ご講演者の方々にご了承いただけたら、ぜひ検討してみたい。また、これからの新たな応募者や、現在、協働のまちづくり活動支援事業に関わっており、来年度も継続を予定している団体の参考になればと思い、質問する。私の捉え方では協働のまちづくりという言葉の中に、いろいろな主体や関係団体と一緒に、事業目的達成するための活動ができればとても素晴らしいことだと思うが、その可能性や難しさについて、田口先生が活動してきた中で申したいことがあればお願いしたい。

発表者：協働とはいろいろ議論されることではあると思う。一つ弁解したいところがあり、本企画は単体でも運用可能であるが、今回の2018年度の経済界の方と連携する中で、市民やいろんな方が関わってこれを完成させた。62名の来場者があり、多少なりとも多くの方が興味を持ち、その場を知の共有として図らせていただいた。ただ、皆様がおっしゃるように江別にはいろんな団体があり、それぞれの特徴や機能を有している。今回は、江別創造舎が単体でDVDを作成したが、もしかしたら更に改革的なことを提案していただき、協働してやっていければもっと発展的な形が将来的に見つけられる可能性がある。抜本から否定することではないので、協力できればと思っている。

阿部：3人の語り部は非常に素晴らしいと思っている。創造舎の目的として、江別の文化歴史を残すことがあると言っていた。私も江別市に来てまだ24、5年ではあるが、江別には非常に素晴らしい歴史があると思っている。本に書かれていることも、今のような形で残すことはとても素晴らしいので、例えば、西野幌を開拓した新潟から来た北越殖民社や、野幌屯田兵、江別屯田兵、それらのことをまだ知っている方もいると思う。そちらの方もどんどん企画していただきたい。

発表者：この事業を3年やっている中で、初年度は関矢信一郎さんに北越殖民社の件でご講話をいただいている。昨年で江別兵村の入村140周年ということで、昨年度に田村様に語り部で話をいただいている。

ただ1人だけではなく、ここにいらっしゃる方でもすごいことをご存知な方もいると思う。より多くの方にこのような語り部の記録を残すように、今後も継続的に私たちの役割として果たしていければと思っている。

会場：3年間の活動が一括りということで、来年度以降も継続的に取り組むという話だが、その上での方向性は先生から話はあったが、端的に言って江別創造舎を進めていくための課題とはなにか。

発表者：やはり、一緒に活動していただくメンバーを増やしていくこと。また、いろいろな方と関わりを持って活動させていただいているが、目標を持って活動している方を増やし、一人一人のキ

キャリアが活かせる場を江別創造舎が媒体になって展開していけたら相乗効果になるかと思っている。

④【生活クラブ江別】（連携先：江別子どもの未来を考える会）

「プレーパーク」を楽しもう！ ～子どもの「遊び」の現状を考える～



発表者：本事業は、今年で2年目となる。1年目は、プレーパークとは何かということを知ってもらう活動を中心に行った。2年目の今年も、プレーパークを開催してみようということ、更にプレーパークを深めるための活動をしてきた。

まず、プレーパークとは何かと言うと、現在の子供たちは遊び場や広場、整った公園もたくさんあり、いろいろなものに恵まれているように見える。しかし、実際に見てみると公園で遊んでいる子供たちの数

がとても少なく減ってきている。元気な声を聞くことも少なくなった。そのような子供たちの現状を見て、私たちは今の子供達における環境や現状を知るために学習してきた。今子供たちの間には「三間」がないと言われている。公園に行っても一緒に遊べる仲間がいない、大声を出すと怒られたりして場所がない、塾や習い事の時間が多くて時間が合わない。この3つの間がないために、子供たちは家の中でゲームばかりになってしまうという現状になっている。親は子供にゲームばかりしていると言いがちだが、実は、親の側にもこのような子供の環境を知らないという背景がある。ゲームをしていれば誰かを傷つけることもなく、クレームを言われることもない。何か物を壊すこともないので、どうしても手軽になってしまうという課題がある。

プレーパークという考え方は、子供がそこで元気で遊べるように大人がサポートしようという考え方。何かを作って遊ばせるということではなく、とにかく自由に遊ばせ、大人は口を出さずそっと見守ることが大事になっている。そして遊びが分からない子供には、ちょっとしたきっかけを教える。ここにロープを巻くとこのような遊びができると言えば、子供たちが自由に遊びを展開できる。そのように、プレーパークというものは名前で聞くとパークとなっているが、近くの空き地や公園など、見守る大人さえいれば、子供たちがのびのびと遊べるという考え方を元に行っている。親御さんは危ないと思うと、先回りをして子供にケガしないようにしてしまうが、プレーパークは怪我と弁当は自分持ち。もちろんケガをしないように見守るが、なるべく禁止事項を減らし、自己責任のもとで遊ぶということがとても大切になっている。私たちは、数年かけてこのプレーパークを知り、勉強会を開いたり見学に行ったりしている。昨年度、この協働のまちづくり活動支援事業に応募し金額が補助されたことで、1年目はプレーパークを知るために、講師の方を招きいろいろな所にお知らせをして、プレーパークを知ってもらうことに力を置いて開催した。今年の2年目はチャレンジの年で、実際にプレーパークをやってみる、できることだけでもいいからまずは開催しようと思い活動した。そして、この活動を細々とでも長くつなげていくために、やる側がきちんと勉強し、なぜこの活動が必要なのか、どのように展開していったら良いかをきちんと押さ

えるために、プレーパークを40年やっているところを見に行くことを今年の大きな柱とした。来年度以降は、プレーパークが定着していくようにということで計画を立てている。今年度の開催は3回計画を立てており、9月にも行う予定だったが、当日が地震の日だったため開催できず、冬は雪が多く降った中で行う予定なので、来週になっている。現段階で夏の1回のみ行っている。

また、実際に手本となる常設プレーパークの施設には、羽根木のプレーパークがあり、プレーパークの日本第1号と言われている。子どもたちの遊び場がなく、本当に子どもが育つのか疑問に思ったご夫妻が、自宅の庭を開放して子どもの遊び場を作ったところから始め、地域の住民の理解を得られ、更にそれが世田谷区をも動かし、行政の支援を受けて現在も続いているところである。まずはそれを見に行き、次に川崎市子ども夢パークを見学した。そこは子どもの権利条例を制定しており、子どもの権利条例に基づいて支援をしているということで後から詳しく紹介する。この施設は、地域への定着を目指すためにプレーパークのパンフレットをカラーで作成しているが、常設プレーパークの内容をしっかりと盛り込んでいる。

これは実際に夏のプレーパークを開催したときの様子だが、この日はものすごい大荒れの天気となった。事前に1000枚以上のチラシを配っていたが、小雨決行と書いており、子どもたちの判断次第では、どんなに雨が降っても1人でも来る可能性があるので、私たちは寒い中テントを広げ待っていた。流石に暴風雨の中で子どもだけで来たということはないが、昨年までやっていた学習会を見て手伝いたいという大人がたくさん来てくれた。子どもが少ない中、この公園には、地域で少し有名な崖が登れるようなところがあり、自然あふれる公園になっているので、まずは大人が子どもの気持ちで体験しようということで、雨の中でも遊べるということ、また雨ならではの遊びができるということを体験、共有した。参加してくれていた子どもも、濡れた土手を滑って喜んでくれたり、テントの下でどんぐりの絵を書いて遊んだり、大人が思うように環境を整えなくても子どもはどんな風にも楽しめるということがわかった。

次に、これは世田谷にある、羽根木プレーパークに行ってきた写真である。ここでは、プレーリーダーと地域の世話人がきちんと会を運営しており、行政の役割、地域の役割、プレーリーダーの役割をそれぞれが担っており、とても学ぶところが多かった。私たちが活動する中では、市にお願いすることが多いが、私たちができるところと行政が得意なところがある。そこでは、市側が公園の一角を使って良いスペースとしてつくってくれており、会もそこにあぐらをかかずに、地域住民に理解がないといけないので、しっかりと地域の方と繋がっていた。この日も大雨だったが、この子どもたちは雨を物ともせずひたすら穴を掘っている子など、とても楽しそうに遊ぶ子どもたちを見学した。ここで学んだことをしっかりと説明するために、いろんな話を聞いてきたが、40年やっているからこそ分かる話もあった。プレーパークではターザンロープを作っているが、昔はそれで子どもたちが遊んでいたが、今の子どもたちはターザンロープが楽しめないということを初めて聞いた。今の子どもたちは手の握力がなく、ロープにぶら下がれず、非常に危険なので、ターザンロープを取り付ける前に、まずロープを一本垂らし、子どもたちが自分の力でぶら下げるようになることを見極める。それが可能になったらターザンロープをつくるなど、子どもが自由に遊べる裏側には、大人のそういった細かな配慮がしっかりと行き届いていた。

次に子ども夢パークは、川崎市に工場の跡地があり、市が処理に困っていた土地を子どもたちのために活かさないかということで、施設の中央にプレーパークを作っている。私たちがここへたどり着いたのは夕方だったが、地域の子どもの吸い込まれるように学校の帰りの子どもたちなど、多くの子どもたちがどんどん入っていった。ここは羽根木と同じように自然があふれていて自由に遊べるが、

ここの特徴はプレーパークを挟んだ先には不登校の子たちが通える施設や自由に雨のときでも作業ができる施設もある。サッカーをしている子もいるが、ここのプレーパークは小さい子のためだけではなく、高校生や大学生もたくさんいて、来ていた近所の小学生に人数が足りないから入らないかと小学生から大学生までが一緒になって楽しく遊んでいるのを見てとても感動した。この施設には不登校の子たちもかなり来ているが、放課後遊びということで、不登校の子も学校に行けている子も一緒にこの場で遊ぶことも多々あるということが非常に素晴らしかった。子どもたちが来る仕掛けもたくさんあり、音楽をするための無料スタジオもあった。そこにも子どもたちが通ったりしており、とても良いと思った。

パンフレットは今作っているところ。プレーパークは子どもに楽しんでもらうことも大事だが、大人の理解もとても大切なので、そこを大事にしながらパンフレットをつくっている。もう少しで完成するところになっている。現在もこのようなプレーパークに共感する仲間を増やし活動中。今回は欲しい物もたくさんあったが、物品購入ではなく人材育成として、長い目で見てしっかりとした柱をつくるために、お金を掛けさせていただいた。

藤本：選考会のときにプレーパークの説明をいただくまで、私も不勉強でよく分からないところもあった。今回をきっかけにプレーパークの仕組みが分かり非常に嬉しく思う。このプレーパークのポイントは、私の理解では何か大掛かりな施設というものを必要とするよりは仕組みづくりや世話人、プレーリーダーという人材づくりがポイントだと思う。その上で仕組みづくりや地域の合意形成や人材育成について視察されてきた中で、得られた知見やノウハウがあれば教えて欲しい。

発表者：1年目の選考会で説明したときには、3年間かけていろいろ取り組んで常設のプレーパークの開催を考えていた。今年は、実際にプレーパークをやり、来年も常設に向けてのプレーパークを定期的に開催したいという思いで動いていたが、羽根木の話を知ると、やりたいことよりもまず、子どもも環境の一番近いところにある大人の理解が得られなければ実現できないと感じたので、プレーパークがどういうものかをもっと理解してもらえるような活動に方向転換したほうが良いのかなという意見が私たちの会の中で出ている。来年に関しては、まだどういう風にしていくか決まっていないので、少しずつ実施していくよりはもっと周りの理解を深めるということに重点をおきたいと思っている。

藤本：もし、来年度も実施される予定であれば、周りの大人たちの理解を深めるための具体的な手法などを考えた上で、申請していただくと判断しやすいと思う。引き続き頑張ってください。

田原：これから活動を広めていかれると思うが、今回まだ残念ながら1回しか開催しておらず、来週の日曜に2回目のプレーパークだと思うが、会場はどこになるのか。

発表者：同じ大麻沢町の西公園を考えている。

田原：前回の発表のときに、私は何人でなさっているのかとお尋ねしたと思うが、現在はお世話されている方は何人いるのか。

発表者：中心になっているのは3人だが、8月に手伝いたいということで来てくださった方が20人近くいた。

田原：やはり屋内はもちろん、外の活動となるとたいへん危険が伴うと思う。事故があった時や、冬は特にそうだと思うが、保険などはお考えになっているのか。

発表者：保険には入っている。8月に開催したときには全体保険として入っている。

田原：事故の無いように願っているので、ぜひ来週成功して欲しい。前回の子どもが2人来たときは、さきほどの写真を見る限りでは全て遊んだということか。発表の中には大人の交流については書かれているが、子どもの内容が書かれていないが。

発表者：私たちは2人と知り合い同士ではなかったが、雨が小ぶりのときに、冬のソリ滑りのように草の斜面をソリや米袋で滑り、崖のようになっているところを自分たちの手と足を使って登るなどして一緒に遊んだ。

田原：とにかく、事故の無いように次の日曜日の成功を祈っている。

阿部：遊びをこれからの子どもに教えるなど、そのような機会をつくるのは大変良いことだと思う。私の子ども時代は公園のない時代なので、山や川に行って遊ぶということをしてきた。このような遊びで体を鍛えたほうが本当に強い子どもになると思う。非常に良いことをしてくれていると思っている。ただ、今のお父さんやお母さん方には安全ばかり考えて、なかなか理解してくれないと思う。一緒に仲間で遊ぶのなら、高齢者の70代、80代はそのような子ども時代を経験しているので、そういう人も誘ったほうがいいと思う。ぜひ大麻はいい場所があるので頑張ってもらいたい。

会場：ネットは活用されていないのか。

発表者：ここにいる私たちはインターネットには疎いが、1人長けた人がいるので、インスタグラムとFacebookを最近立ち上げた。私たちはよく分からないので詳しくお伝えできない。

会場：若い親御さんは間違いなくスマホを持っているので、小雨決行なども、SNSでお知らせするなど、活用方法もあると思う。詳しい方に関わってもらって活用してもらったほうがいいと思う。

発表者：今後検討したいと思う。

会場：私は大麻の西公園のすぐ近くに住んでいる。自治会でも子どもの遊び場がないという意見がある。今回開催していただくことは非常に良いが、地元に住んでいる人が殆どわかっていないのでは。まだ1週間あるなら大麻西自治会や周辺の自治会など、特に私どもの周囲は最近住み替えが進んでおり、子育て世代がたくさん入ってきている。もう1度PRの機会があると思うので検討してほしい。

発表者：8月に開催したときは大麻の小学校全てにチラシを入れ、西公園近くの自治会をお願いして、回覧板でチラシを回した。今回はまだ追いついてない部分があるが、まだ1週間の時間があるので検討してみんなに来てもらいたいと思っている。

⑤【支え合いの拠点（居場所）づくりの支援のための研究・実践グループ】
「研修会「地域の居場所のつくり方 ～地域住民と考える～」」



発表者：私たちは、住民と考える地域の居場所の作り方という研修会を開催したので事業報告をする。今回の事業の目的は、江別市内に子ども食堂、地域食堂、居場所の輪を広げたいという気持ちがあった。子ども食堂や地域食堂のような居場所が、歩いて行けるところにたくさんあったらいいなということが頭にある。そして居場所の必要性を理解し、実際の子どもの食堂、地域食堂という居場所のあり方を知ってもらいたいということで、研修会を開催し、江別市民の皆さんに

来てもらいたいと考え、研修3ヶ年計画というものを立てた。計画は、「ホップ・ステップ・ジャンプ」として、1年目から3年目までこのように考えている。まず1年目の今回は、地域の居場所の作り方ということで、どうしたら地域の居場所ができるのか、あるいは実際に居場所づくりを始めている方々がどうしたらそれを続けていけるかということ講師の方を招いての研修として開催した。2年目以降は「地域の居場所、やってみたらこうだった」。3年目は「地域の居場所づくり、こうすればあなたも始められる」として、やってみたいと思う方が始められるよう、役立つノウハウの蓄積を共有することを目標としている。今回は、1年目に地域の居場所の作り方研修会を開催したので、このあとから具体的にご報告したい。

事業内容は、江別市コミュニティーセンターの多目的ホールを使用して開催した。開催日時は昨日、2月9日土曜日の14時から16時で開催したばかり。講師の方は、実践報告の1人目として東京都文京区で常設型の居場所づくりをしている「こまじいのうち」というところから代表マスターの秋元康雄さんに報告をしていただいた。2人目の実践報告として、札幌市豊平区で地域食堂「かば亭」を運営し、代表されている井上寿枝さんに報告をしていただいた。最後に講義として、文京区社会福祉協議会地域福祉推進係地域連携ステーション係長の浦田愛さんをお招きして、どうすれば居場所づくりを進めていけるのか、そのプロセスやノウハウ、考え方などをご教授いただいた。開催にあたり、江別市と江別市社会福祉協議会から後援を頂いている。今回の事業の広報については、御覧頂いているスライドに写しているチラシを作成し、江別市、江別市教育委員会、江別市社会福祉協議会、江別市民生委員児童委員連絡協議会、江別市高齢者クラブ連合会、江別市内の各地区センターや公民館などを訪問し、チラシの配布や掲載のお願いに行った。また、道新の折り込みや広報えべつ、まんまる新聞、介護新聞への掲載と、江別市内の郵便局にも掲示をしていただいた。私たちは子ども食堂、地域食堂を開催するにあたり、郵便局にも掲示をしていただいております、今回

はそれも合わせてチラシを貼っていただいている。江別駅にも江別市内情報を貼る掲示コーナーがあり、そちらにお願いをしてみたところ、ご快諾してくれたので掲示していただいた。それから私たちの会で用意している Facebook があり、そちらにも何度も更新をして開催の案内をし、江別市内ではないが隣の厚別区のラジオで紹介をさせていただいた。

研修会当日のスケジュールは、12時から準備を開始して、1時30分開場受付開始、そして2時から開会した。最初の10分で趣旨説明や講師紹介を司会の方から行い、その後15分ずつで秋元康雄さん、井上寿枝さんにご報告をいただき、30分間で浦田さんのご講義をいただき、50分間の質疑応答、そして16時に閉会というスケジュールになっていた。しかし、実践報告の時間が少しずつ伸びてしまい、実際の質疑応答の時間は30分ぐらいになってしまっていた。こちらは準備の様子だが、北翔大学の健康福祉学科の学生9名に参加してもらい、学生スタッフ9名と教員スタッフ7名で準備、運営をした。参加者状況については、事前の申込みを66名の方からいただいた。当日2名の方が来られなかったが、申し込みなく当日来られた方が18名来ており、合計で82名の方にご参加いただいた。多くは江別市民の方々だったが、他にも、小樽市や苫小牧市、東川町から来ていただいた方もおり、遠くから情報を得られて市外からも参加していただいた。ご所属のない一般住民の参加は申込時に所属を書かれていない方ということではしか把握ができないが、およそ50名の江別市住民の方にご参加をいただいた。

ここからは実際の報告内容や講義内容を少しだけ紹介したいと思う。1人目の「こまじいのうち」秋元康雄さんからのご報告は、まず、「こまじいのうち」は子どもから高齢者誰でも集える常設型の居場所であるということ。その始まりは、東京都文京区駒込地区の居場所づくり計画のときに、秋元さんが親戚の家を使ってもらえないかということで申し出をした。その後、さまざまな関係機関との協力や調整の末に、平成25年10月、「こまじいのうち」としてオープンした。オープン時は軌道に乗らない日もあったそうだが、現在は年間4000人が集う居場所となり全国から視察者が訪れている。私たちも一昨年に「こまじいのうち」の視察に参ったが、聞いたところによると沖縄からも視察者が来ており、全国から注目されている取り組みになっている。また、視察者が来るだけでなく、秋元さん、浦田さん共に、全国から講演依頼も受けている。

2人目の地域食堂「かば亭」の井上寿枝さん。こちら子どもから高齢者、誰でも集える居場所になっており、月1回、地域食堂を開催している居場所となっている。毎月100名程度の参加があり、一番多いのが小学生50名ほどで、その他、幼児や中高生、保護者の方、大人の方、ボランティアスタッフなど、総勢で100名程度毎月の参加がある。こちらは平成28年に「NPO法人つなぐ」で、子ども食堂ができたという声があり、話し合いや見学などを重ねて創設に至った。そして平成29年の9月に地域食堂「かば亭」としてスタートされている。その趣旨は経済的困難だけではなく、孤食の子や、家庭の中に居づらさを感じる子どもたちと、親たちもほっとできるような居場所になるように開催をしている。

3人目の講義の浦田愛さんは、文京区の紹介や、浦田さんがもともと担っていた地域福祉コーディネーターについて話をいただいた。地域福祉コーディネーターとは、住民等からの相談を受けてから地域の中へ入り、地域の人々や関係機関と協力して課題を明らかにし、解決の方向に向けた支援をするということを担っている役職である。次に、なぜ居場所が必要なのかという話で、サービスや制度に繋がりがづらい制度の狭間の課題というものがあり、例として挙げられていたものが、62歳男性の話で、高齢者のサービスを使うには年齢がまだ若く、障害もないためにサービスや制度につながりにくい。しかし、何らかの居場所が必要だと支援の必要性がある方には、そういった制度や

サービスがないので、孤立しがちになってしまう。更には困っていると言えない、あるいは言わない。そもそもその認識がなく、孤立の状態になってしまうという人がいるということ。例えば、若い頃に秘書をやっていたときは良かった、かつて何々をしていたときは自分も生き生きとしていたけれど、今は誰にも映らない、まるで透明人間になったみたいだ、という表現をされた方もいた。こういった方々が社会的孤立という状態に陥ってしまうということを指摘されていた。

次に居場所づくりのプロセスとして、浦田さんから単機能、中機能、そして多機能の居場所をつくる流れについて説明があった。まず単機能の居場所は、交流機能を持った月1回程度を開催するもの。2つ目の中規模の居場所は、単機能の居場所に加えて、互助の機能が加わり、更に開催頻度も少し多くなっているもの。3つ目の多機能の居場所は、2つの居場所に加えて常設型であることで、自主的、総合的運営であるということが加わった機能を持った居場所になっているもの。こういったプロセスで居場所づくりがなされているという説明があった。文京区にはそれぞれの機能を支える仕組み、互助や助成金などがあるということもご紹介いただいた。

そして最後に、浦田さんから今後の地域づくりとして、地域福祉の政策化により、住民主体の活動とは、住民だけで行うのではなく、協働が重要になっているということもご指摘があった。最後には、文京区の場合でいえば、行政が地域福祉計画の策定、政策立案、予算確保をし、社協が助成金などの企画づくりや住民活動への推進をし、住民は地域にとって必要だと思う自由な活動をするということを紹介されていた。いろいろなことを難しく考えて見通しが立たないからできないと思うのではなく、住民の活動というものは、まずやってみることが大事である。私たちも浦田さんに後押しされて、子ども食堂、地域食堂をやってみて1年以上が経過している。

アンケートの結果は、昨日の開催なので集計しきれしていないが、感想をいただく項目を一部抜粋してご紹介したい。「江別で居場所を作ります。実践報告を聞かせてもらうことで、どう進めて良いのか大きなヒントをいただいた。はやくスタートしたい」という感想や、「どの地域にも『こまじいのうち』、『かば亭』のような居場所が必要」、「本当に聞けてよかった、もっと広くこういった会を開催し、知らせてほしい」、「江別市さん、江別社協さんに道央エリアをリードする活躍を期待したくなった」、「活躍されている当事者の方々の話はとても説得力あり良かった」という声をいただいた。「将来、地域食堂をつくりたいと考えているので立ち上げまでのプロセスや助成金について知られてよかった」、「研修会をもっと開催して欲しい。地域食堂をぜひ実現させたい。江別市で立ち上げる場合の内容や実践報告も聴きたい」という声もあった。「行政、民生委員、社協、自治会など、全ての人たちと本気で取り組む姿勢が求められている」というご意見もあった。「江別にも浦田さんのようなコーディネーターが欲しい」というご意見もあった。

ここまでは肯定的な意見で、多くのアンケートも肯定的な意見ばかりかと思っただけ目に留まったのが、「文京区の実践は金持ちの東京の話だと思う」という声もいただいた。江別では無理だということ、研修会に参加されて思ったのかもしれない。参加者 82 名に対して、アンケートをご提出いただいた方は 59 枚だったので約 70%の回収率だった。

事業目的に対してどのような達成、効果があったのか。昨日終わったばかりで、整理できておらず簡単になってしまうが、まず江別市民に多数参加してもらえたということが、私たちにとってとても良かったと思う。住民と考えるとしたにもかかわらず、もしかしたら関係者の方しか集まらないかもしれないと考えていたが、住民の方からたくさんの参加をいただいたことが本当にありがたく、広報の効果があったのかなと思っている。アンケートの中には研修会に参加してよかったかという質問があるが、大変良かったが 32、良かったが 25、どちらでもないが 1 で、どちらでもないと言

かれた方がアンケートで否定的な回答をされた方と同じなのだが、その他未回答が1になっている。良くなかった、あまり良くなかったという項目もあったが、そういったお答えをいただいた方はいなかった。

次に、居場所づくりの参加取り組みに対しては、前向きな意見が多数だった。アンケートの項目の中に、現在居場所づくりをしていない方への質問として、これからやってみたいかという問いかけをかけた。そうしたら、自分で行ってみたい、居場所づくりに参加したい、あるいは協力したいという回答があった。実際に既に始められている方はこの設問には答えない仕様になっているので無回答もあったが、参加したくないという回答はなかった。皆さんがなんらかの居場所づくりに関わりたいという感想を持たれたのではないかと思う。今後の事業の継続性については、最初に示した研修予定3ヶ年計画の1年目は達成した。次の2年目以降は、また居場所づくりに役に立つ研修会を開催していきたいと思っている。

事業収支は概算で整理はできていないが、合計で33万1,871円を予定している。これは、元々東京の講師をお招きするにあたって、1泊での予定を考えていたが、2月の開催の予定ということもあり、当日入りをしていただくと来られない可能性を考え、無理を言って前日入りをお願いしていたので旅費が少し増えている。東京からの講師の車代として会場から宿泊施設までの帰りの分を少し用意させていただいた。これも、研修後にJRやバスで帰れば良いというご意見もあると思うが、秋元さんがご高齢ということもあり、安全にお帰りいただきたく車代を出させていただいた。また、宣伝広告費の部分でチラシ制作費や印刷、新聞折り込みをし、広く住民の方に参加をしていただきたいと思い、可愛らしくより素敵なチラシをより多くの人に届けたいと思い、6000部のチラシを印刷した。新聞折り込みを中心に周知に使わせていただいた。広く多くの方への周知をしたいということで、予定よりも多く予算が掛かっている。また改めて事業の収支報告等を整理したい。

藤本：来年度以降に関して、今回は1年目だが、2年目以降については当初計画とは変更なく進めていく予定か。

発表者：予定通り2年目、3年目も続けていきたいと思っている。

田原：尾形先生を中心に子ども食堂を始められて、江別市内での活動は3年目になったのではないと思う。

かなりの数の子ども食堂を展開していると思うが、何箇所ぐらい展開されているのか。

発表者：2017年7月に私たち子ども食堂、地域食堂として開催し始めてから、現在は5箇所行っており、月に1回や不定期での開催になっている。昨年末の2018年12月には連絡会が立ち上がり、みなさんと顔合わせが出来るようになり、徐々に居場所づくりが進められて来ている段階だと思う。

田原：昨日も私が知っている方が講演会にたくさん出席し、SNSやLINEで素晴らしかったと報告があった。これから、たくさんの経費が掛かると思うが、尾形先生を中心に、引き続き展開されたほうが良いと思う。過去の経験やノウハウを広げていただきたい。

発表者：住民の方々とも協力しながら私たちが居場所づくりの支援のための研究実践グループとし

て立ち上がっているのです、今後は、江別市内において、支援ができるようになりたいと思っています。しかし、まだいろいろなノウハウの蓄積が十分ではないので、江別市内で活動が続けられるように、これからも多くの方の協力をいただきながら勉強していきたいと思う。

阿部：自治会の立場から、居場所づくりは我々も進めているが、あまり協力的な考えを持っておらず、ただ遊ぶことばかりを考えて、なかなか上手くいってない。これからも尾形先生に指導してもらいながらやっていきたいと思っている。

次年度は、高齢者クラブのふれあいサロンも4年目になり、6箇所ぐらいで行う予定。これはまだ初歩的な段階なので、スケジュール等を皆さんに協力していただきながら、やっていきたいと思っている。

発表者：江別市内はもちろん、子ども食堂、地域食堂に限らず、さまざまな活動をしている方と情報共有しながら、居場所づくりだけではなく、将来的には、皆さんが住みやすいまちづくりまで考えていければと思っている。ぜひ協力しながら進めていければと思う。

阿部：特にお金が掛かるように見えるので、例えば会場に江別市の公共施設を利用すると、会場費はあまりかからないと思う。是非相談に乗るので頑張ってほしい。

会場：これまでの1年間、どれぐらいの子どもたちや地域の人が、何を目的に、何人ぐらい来たのか。

発表者：最初の頃は4~50名だったのが、最近は食事タイムという5時半からの食事を目的に来られる方を中心に、全体では70名ぐらいの方が集まるようになっている。

会場：何の媒体を知って集まっているのか。

発表者：多くは参加者に次回のチラシをお渡しして、口コミなどで友達のお母さんを連れてくるなどして集まってくることが多い。また、Facebookで開催の周知をしており、それを見て来られたという方もいる。あちこちに掲示をお願いしているので、それを見てきているとは思いますが、実際にどなたが何を見て来られたかというところまでは具体的に調査は出来ていない。

会場：まんまる新聞はまだ使っていないのか。

発表者：まんまる新聞は、2017年12月の初回開催のときにご案内を出した。その後、昨年12月5日に江別の眞願寺というお寺で2ヶ所目として開催をする際にも出した。そして、毎月やっている子ども食堂の開催と合わせて周知をしていただいたので、合計で3回まんまる新聞に周知している。

会場：昨日の集まりはとても刺激を受けた。おじいさんが作り出す味のある場所、若い地域コーディネーターのはつらつした行動力、行政がこういう市民がいるからお金を出す必要があると感じて

お金を出すようになったこと。元々何もしていなかった社協が何かをするようになったこと。とても強い刺激受けたので、これを行動に移すことによって、人や行政を巻き込みながらこれから江別は何か始まる気がした。

発表者：ありがとうございます。とても貴重な感想に私たちも背中を押された気分です。

<コメンテーター総評>

【田原 久美子 氏】

先程の生活クラブ江別さんの発表の中で、なかなか PR が行き届かないとおっしゃっていましたが、このような時こそ、メディアネット江別さんに取材して頂いて1分間のCMを作って情報を流す、こういうことが協働のまちづくりではないかと思えます。

【阿部 実 氏】

今日は参考になる発表をたくさん聞かせて頂きました。私も地域を支えている自治会、高齢者クラブを先頭に立ってやって活動しておりますが、本日のような皆さんの発想がどれだけ大事な事がわかりましたし、このような活動をされている事が頼もしく思えます。

私達もいろいろな面で協力していきたいと思えます。一緒に良い町になるように頑張っていきたいと思います。

【藤本 直樹 氏】

この事業に取り組んでいらっしゃる方には、それぞれ個々の活動が終わった段階で、あるいは1年間終了した段階で振り返りをして頂きたいと思えます。上手くいった事、手ごたえがあった事は次の年も続けて頂きたい、失敗した、十分な周知が出来なかった、もっとこうすれば良かったなどの課題や改善策が見つかれば次の年に改善して頂ければ3年経てばレベルアップしていくと思えますので、是非しっかりと振り返って頂きますようお願いいたします。阿部会長もおっしゃっていましたが、私達がお手伝いできるかという時に、申請段階での審査と最後の報告を聞くだけではもったいないと思えました。

もし来年チャンスがあれば、途中の段階で「お悩み相談会」みたいな形でアドバイスが出来ればと思えます。私達コメンテーターだけでなく、4大学の専門分野の先生も巻き込みながらまちづくりアドバイザー的に皆さんの活動をサポートしていきたいと思っておりますので、事務局や江別市に提案しながら進めていきたいと思っております。